

# 現実か幻か？

奇妙な体験を重ねてくると、怖いという気持ちはだんだんと薄れてきた気もする。本栖湖の湖面を歩く人、深淵に木霊する子供の声、芦ノ湖の金縛りなど、長い間釣りを続けていると、実に奇妙な事に出くわすものだ。先だっては海外釣行先の誰もいない河原で日本語で誰かに呼びかけられる始末。奇妙な出来事に慣れてきた訳ではないが、「霊は人を殺したりしないよな。」などと考え、ニユーラスに出てくる犯罪者に絞められるよりはましと思っよう、自分に言い聞かせている。

もちろん、ある日突然こんな体験に出逢うよつになつた訳ではなく、それは中学時代に夢になつて、雄蛇ヶ池へ通じ始めるよつになつてから奇妙な体験がおきるよつになつた。

私が一端の釣り師を気取つて雄蛇ヶ池へ通つていたのは中学生の時。フライフィッシングを学んだものやはこの雄蛇ヶ池で、はじめての獲物もブルーギルだったことを覚えてる。当時雑誌に載つていた雄蛇ヶ池の写真には、鬱蒼として暗いハス畑の密林の中をカヌーで進むカットと、プロンスバックと言われるブラックバスを高くとあげる勇姿が載つていた。マズメ時をイブニングと呼ぶのを知らず、夜にかけて魚がたくさん釣れることを雑誌から学んだ。もちろん、夜釣りを親が最初から許す訳がない。親を納得させるために、いくつかの約束を果たすことという条件で、土日の釣りが許されることとなつた。まず、行動は必ず二人以上ですること。そして全ての列車やバスの乗降時間が記されたものをこしらへ、それに添つた行動と時刻に家に連絡をするというものである。だが、そんななお約束も最初のうちで、いつしか釣り不良息子へと変貌していったのは事実。親には「友達と行く。」と出し抜き、一人で行けばもつと良い思いができるのでは、と友達をも出し抜く。かくして、一人きりの釣行は決行された。

電車が定刻より遅れたため、雄蛇ヶ池に着いた時にはすでに暗くなつてた。怪しげな闇が辺りを覆い始めていたが、そんなことには気にもとめず、早々に釣りを始める。池端はいくらか斜になつており、いつものようにぬかるんだ水辺を右回りで釣りを進んでいる。季節は5月の半ばを過ぎたあたりだと思つたが、群生するハスの高さは丁度水面に張りつく程度で、対岸まで見渡せる状態だった。しかしながら、この池を巡る道は鬱蒼とし、昼でも明かりが欲しいと感じる場所があるくらいだ。ましてやこの暗がりともなる釣りにては恐怖心よりも魅力的なランカーバスに合いたい為に一切見えず、バスのアタックだけに集中し釣りを続けたので

平気だったのだろう。

アタリはない。程なく進むと、釣り慣れた給水塔ワンドに出た。この辺りになると葎の林が多くなり、良い型のバスも多くなる場所だ。

月は明るかつた。水面がさざ波でキラキラと光る。緊張の時間が過ぎ、私はその場にしゃがみ、だれたキャストイングを繰り返して始めた。ふと、水面の月明かりに目を落とすとキラキラと光る水面の中に、何かがうごめいているようである。目を凝らしてみるとそれは、人間の形をしているようで、全身が発光しているように見える。上半身を水面に出し、まるでクローリングしているかのように水面を右左に動き回る。誰かがどこかで新しいルアーでも投げているのだろうか？ それにしても良く光っている。それは数分ほど続き、音もなくふつと消えていった。それと同時に今度は後方から話声が聞こえてきた。二人で話をしているようで、こちらへ近づいて来る。その

声の主は、私のいる場所のすぐ上にある道か聞こえてくる釣り人のものだと感じ、大きな声で「今晚は！、今晚は。誰かいるんですか？」と声をかけてみた。しかし私の声を無視し、二人は何かを言い合っている。でも、すぐそこで話しているのだけれど。聞こえない筈はない、声高にしてもう一度。

「今晚は！誰かいますか？」返事をしない。声は少しずつ遠のいていく。背筋に悪寒が走る。怖い、独りだ、どうしよう。次の瞬間、大きな唸り声と共に葎の中を獣が疾走した。私はその場にへたりこみ、どうすることも出来ず、独りの恐怖を初めて経験した。

獣の唸り声は私を威嚇しただけなのか、それ以上の行動にはでなかつた。それにしても、今までに聞いたこともないようなり声、狸が生息していることは知っていたが、とても狸とは思えぬ唸り声だった。

ほぼ腰を抜かした状態でその場へ立ちすくんでいたで、知らぬ間に時は刻まれて西の空がわずかに闇から解放され始めていた。それを期に私は持っていた道具を握りかえし、一目散にポートハウスを目指した。時計は3時半をまわっていた。

少年時代の私にとってこれでめげて帰ると、お小遣い事情で次回来月になってしまふ。私はいつもの通り、二目をポートで釣ることにした。

朝一番乗りを果たした私に、ポートハウスのおじさんは暖かく迎えてくれる。

「おはよう坊主、早いな。」とおじさん。  
「おはようございます。タバから釣りしていたんですよ。」と私。

「へえ、何処でやつたの？」のおじさんの問い、

「給水塔の下。」と答えた。  
するとおじさんは顔色を変え、一言も話をしなくなつた。なんか変だ。私はすかさず聞いた。  
「何かあったんですか？」と聞くと、  
「先日ね、あそこで人が死んだんだよ。」

なんと。人が死んでいたのだ。だが、そんな話を聞いても、めげる少年ではなかつた。昨日ブラックバスを釣つていないので、どうしても釣りたい。本当の所、そのまま帰りたい気分だったが、何かに引き寄せられるかのように、私はそれでもポートを借りることにした。

当時の船はポートと言つよりは田舟と言つた感じの朽ちた木造船で、木の櫓を船首で漕ぎながら前へ進む子供にとってはこの櫓はとても重く、前にはなかなか進まない。

トロリとした水を蓄え重くなつた櫓で静かに釣り進んでいく。岸を歩いて釣ると同様に右回りで進む。すると、例の給水塔ワンドが見えてきた。次の瞬間、私の顔は青ざめた。昨夜、暗い時間に入ったので気づかなかつたのだが、死者へ花が手向けであつたのだ。それも私が座つていた場所、私が腰掛けたおかげで供えられた菊はバラバラになっている。前身の毛穴が開き、きつと髪の毛逆立つていたに違いない。私は心の中で、ごめんなさいを連呼しながらその場を立ち去り、ポート屋おじさんに何も言わずに一目散に帰路へつた。

あとでよく考えてみれば、あれはクローリングしている人ではなく、もがき苦しんでいる人の霊だったのかもしれない。

しかし、これに徴りずに少年期はそれでも雄蛇ヶ池と共に過ごした。水神様の下では足を引く張られ、テントを張れば獣が寄りかかり、口ウソク立てつて池を回るおばさんに会つたりもした。あそこまで情熱的に釣りができたのも、当時は釣ることが軌跡に近い。そこには少年を虜にするブラックバスがいたからこそに違いない。

今では雄蛇ヶ池はすっかり様変わりし、鬱蒼として陰が漂う気配はまったく無くなつてしまつた。しかし、あの少年の日の雄蛇ヶ池の体験は、少年が見た1977年の夏は幻では無かつた、私は確信している。

